

今、この国はピンチに陥っている。

今日は国王の生誕祭。

巨大なお城の大広間で、呼ばれてもいないのにやってきた魔王エヴォルがまさに今、玉座の陛下に刃を向けていた。

剣先を突きつけられ動けないままにいる陛下。

魔王に近づけないながらも剣を抜き構える騎士たち。

恐怖に囚われ声も出せずその場で凍りついた貴族たち。

そして、ただのメイドである私は、広間の隅で震えていた。

このまま陛下が殺されればこの国は崩れる。

ここにいるみんなも同じく殺されるだろう。もちろん私もだ。

せっかくただの庶民である私が城のメイドにまでなれたのに。

安定した仕事を手に入れ家族に楽をさせてあげられていたのに。

どうしてこんなことに……。

ちらりと魔王を盗み見る。

人間よりも大きな体躯。

長く艶やかな黒髪に蒼い瞳。

造形は魔王という名に似合わずとんでもなく美しい。

連れている三人の側近たちも同じく大きく美しかった。

魔族はときどき人間を拐っているとの噂もある。

この美貌では誑かされる人間がいてもおかしくないとすら思ってしまうほどだった。

——そのとき。

魔王エヴォルの視線が動いた。

大広間を見渡すように。

私とも目が合った。

そしてその視線は外れない。

私と目が合ったまま止まってしまった。

魔王と視線が合っている。

恐怖で身がすくむ。

けれど魔王の次の言葉で広間の空気が一変した。

「あのメイドをもらおうか」

「えっ！？」

大きな声で驚いたのは陛下だ。

「聞こえなかったのか？あのメイドをもらう」

「私の命ではなく？王子や姫でもなく？あのメイドを？
ただのメイドを？」

「そうだ」

「あのメイドを差し出せば私の命は取らないと？」

「そういう意味だが」

…………え??????

大広間の中心で勝手に話が進んでいる。

私の壁となっていた貴族たちは一斉に道を開けた。
私と魔王の間には遮るものが何もない。

「わ、分かった……、それで国が助かるのならば」

勝手に了承されてしまった。

いや、もちろん、ただのメイドである私に拒否する権利はないけれど。

「連れていけ」

魔王にそう言われ近づいてくる三人の側近。

一人に足首をまとめられ、一人に手首をまとめられ、
一人に腰を抱えられ。

「うそ、うそお、そんなあ……！」

私の情けない声が大広間に響くと、翻ったマントで視界が真っ暗になった。

——次に視界に光が飛び込んできたとき、そこはもう見慣れない城の中だった。

謁見の間だろう。

魔王は玉座に座り私をまじまじと見ている。

私は怯えつつも周りを見渡した。

私の国のお城とは違う、なんだか暗くて刺々しくて、落ち着かない。

本当に来てしまったんだ。魔族の城に。

「ルド、リナリ、カナン、そいつの身を清めてこい」

「分かりました！」

「慣らしておけよ」

「お任せください」

魔王と側近たちがそう言葉を交わし、そして三人の側近のうち一番体の大きな男に肩に担ぎ上げられた。

連れてこられたのはお風呂だ。

ただのメイドの自分では入ったことのないような、豪華で煌びやかで広いお風呂。

三人は自らも装備を脱ぎ捨て軽装になりまるでペットでも扱うかのように私の服をあっという間に脱がしていった。

「こんなの使い魔たちにやらせておけばいいんじゃないの」

低く響く声でそう言ったのは私を担いでいた体格のいい側近だ。

ここに来るまでの会話では、この男はカナンと言うらしい。

褐色の肌に短い髪、見るからに強そうに見える。

「しょうがないですよ、魔王様が下っ端たちに触らせるなって言うんだから」

細身で冷たい目元をした側近がそう答えた。この男はリナリだ。

大きなバスタブに落ちる湯を手で確認しながら、さらさらの銀髪が揺れてその目元を隠している。

「でもオレたちも味見していいってことだろ？最高じゃ

ん、役得！」

弾む声でそう言ったのはルド。

魔族の割に爽やかな声で性格も明るそう。

髪もキラキラと輝く黄金色で、大きな瞳もこの城にわずかに差し込む光をよく反射させている。

……お風呂に入れられるらしい。

身を清めるとはそういう意味か。

その後はどうなるんだろう。

魔族に拐われた人間で無事に帰ってきた者はいない。

なんらかの魔術に贄として使われたとか、血肉を食べられたとか、そういう噂は耳にしたことがある。

なんにせよ、もう終わった。

私の人生はここで終わりだ。

「入れ」

カナンに軽々体を持ち上げられバスタブに入れられた。

まだ膝下までしかお湯は溜まっていない。それでも温かいお湯はなんだか気持ちよかった。

湯船に体を浸すなんて、貴族やそれ以上の人間しかないことだ。

だから知らなかった。温かいお湯がこんなにほっとするなんて。

「さ、洗うぞ〜！」

ズボンを捲り上げたルドが湯船に入ってきた。

突っ立ったままの裸の私に、何故かルドは両手を伸ばしてくる。

洗う？私を？

「じ、自分で洗えます」

「いいからいいから！」

逃げようと一步後ずさったけれどそんなことで逃げられるわけもなく。

ルドの両手は撫でるように私の体を滑り始めた。

体の大きな魔族の大きな手が湯をかけながら私の体を撫でていく。

サイズが大きいだけで作りは変わらなさそうなのに人間の手とはやはり違う。皮膚が硬い気がする。

その手が素肌を撫でるからなんだかくすぐったい。

「…、っ」

「ほんと人間っていい匂いするよな〜」

のんきにそんなことを言いながらその手は足先から腰辺りまで移動してきた。

するとバスタブの外にいたりナリとカナンも同じように入ってきてしまった。

その二人の手も私の体に伸びてきて。

「本当ですね、いい匂い。人間の匂いなんて久しぶりに嗅ぎましたよ」

「服がないと余計に濃いな」

少しだけ溜まってきたお湯を掬い、肩や腰をそれぞれ撫で始める。

広いバスタブに突っ立ったまま、魔族に囲われ湯をかけられながら体を撫で回されている私。

事態を飲み込まなくて黙ってされるがままになっていると。

「ッ」

ふいにリナリの手が胸を撫でた瞬間に体が反応してしまった。

硬い皮膚が胸を上から下へ撫でたから。乳首が。摩擦してしまっ

びくっと揺れた体が背後にいたリナリに当たった。

「おや、なんだかむくむくと勃起上がってきましたね」

頭上から覗き込んでくるリナリ。

視線が落とされた胸は確かに右の乳首だけが育ってしまっている。

「片方だけじゃみっともないよな、こっちもしてやるよ」

すると今度はカナンが左胸をわざとらしく撫で上げて。

「あ、」

わざと乳首に引っ掛けるみたいに指を当てるから。
そっちもむくむくと勃起上がってしまった。

……？

なんでこんなことされてるんだろう？

「こんなに勃たせて…余計に引っ掛かってしまいますよ」

さす♡

「うあ」

さっきまで肩からゆっくりと撫でていた手は私の胸に留まってしまった。

さす♡さす♡さす♡

「あ、っ」

「こらこら、じっとしててください。洗えないでしょう」

大きな手が胸を上下する♡

勃起した乳首に全ての指が順番に引っかかっていく♡

ぴん♡ぴん♡ぴん♡ぴん♡

「んうッ、う」

「さらに大きくなっちゃいましたね」

リナリが片腕で私の腰を抱き抱えるように拘束すると、さらにその手の動きはあからさまになった♡♡

ぴんっ♡ぴん、ぴんっ♡ぴぴぴぴぴぴっ♡

「あッ、あ♡ん♡んああっ♡」

「こっちも同じようにしてやらないとなあ？」

じっとしてられない♡

リナリに拘束されたまま自由に動ける上半身だけでなんとかその刺激を逃そうとしていると、今度は前にいたカナンが肩に腕を回し左胸をその手で覆って♡

ぴぴぴぴぴぴぴぴっ♡♡ぴぴぴぴぴぴぴぴっ♡♡



「ああああっ♡♡♡」

上下させてくる♡

ぴぴぴぴぴぴぴっ♡♡♡ぴんっ♡♡ぴんっ、ぴんっ、
ぴぴぴぴぴぴぴっ♡♡♡

びく♡♡びくっ♡♡体がビクついてしまう♡♡♡

「うあ、ッ♡♡あ”、はっ、あっあああッ♡♡♡」

何が起こってるんだろう。

どうして魔族に囲まれて乳首弾かれてるんだろう？

頭の中ぐちゃぐちゃだけどひたすらに乳首ばかり責められてまともに立ってられない♡

肩をカナンに抱かれ腰をリナリに抱かれていなければもうとっくに崩れているだろう♡

「こっちもいい匂いしてきたなあ♡」

二人に抱えられつつも腰が引けている私の足の間に、今度はルドが手を入れてきた♡

さすがに驚いて足を締めてしまった♡

「なんですかこれ、なんでこんなこと…」

「いいじゃん、気持ちいいことしかないからさ♡」

気持ちいいこと？

なぜ？？？

なんの答えも見つからないまま、ルドに足を開かされた♡

大きな手が割って入ってきて割れ目を撫でる♡

「濡れてる…♡これを、このちっちゃなクリトリスに塗りつけて…♡♡」

「ッああ♡♡」

ぬめりを掬った指がクリトリスを撫でた♡

ビクッ♡と跳ねた腰はリナリに抱え直される♡♡♡

「このちっちゃいところ、人間の女の一番弱いところだろ？♡♡」

ちゅく♡♡

そう言ってルドは指の腹でクリトリスを擦り始めた♡♡

ちゅく♡♡ちゅくちゅくちゅく♡♡

「ひ、ッ♡♡あ♡♡あ♡♡」

くるくると円を描くように♡それから♡

ぬりゅ、ぬりゅ、ぬりゅ♡♡ぬちぬちぬちぬちぬちぬち♡♡♡

「あんッ、あ♡♡あ、あはッ、あ♡♡♡」

軽く押しながら前後に指を往復させる♡♡♡

クリトリスが一気に熱くなる♡♡

「こーんなちっちゃいお豆触られて体ビクビクさせて…♡♡人間ざっこ♡♡それが可愛いんだけど…♡♡♡」

「ッ、あ、あ♡♡♡……ッ♡♡や、やめ、っ♡♡んああッ♡♡♡」

くちくち♡♡

ぬりゅぬりゅぬりゅっ♡♡ぬりゅ、ぬりゅ、ぬりゅっ♡♡♡

ちゅくちゅくちゅくちゅくちゅくちゅく……♡♡♡♡♡

ルドの手はしつこくクリトリスを狙い続け♡

ぴぴぴぴぴぴッ♡♡♡ぴんっ♡♡ぴんっ♡♡ぴぴぴぴぴぴッ♡♡♡♡♡

リナリとカナンの指は乳首を弾き続ける♡♡

これ……、まずいかも♡♡♡♡気持ちよくなっちゃってる♡♡

両方の乳首を指で弾かれて♡クリトリスを撫でられて
♡♡

体くねらせても逃げられない♡

相手は私を拐った魔族なのに♡♡♡

三人がかりでされるの気持ちよくてやばい♡♡♡♡

「ッあ♡♡あ、あ、アっ♡♡♡ア、ん♡♡だめ、だめ
……♡♡♡」

「そんなこと言っても乳首ビンビンですけど」

「顔だってすっかりとろけてるじゃねーか」

「愛液塗りつけなくても勝手に垂れてくるし♡♡イキそ
うなんだろ♡♡♡」

ちゅくちゅくちゅくっ♡♡♡ぬりゅ、ぬりゅ、ぬりゅ
っ♡♡♡

ぴぴぴぴぴッ♡♡♡ぴぴぴぴぴッ♡♡♡ぴぴ
ぴぴぴッ♡♡♡♡

「あ♡♡♡あ、ッ♡♡♡あ…………ッ♡♡♡は、ア♡♡♡
イク、…、イ、っちゃうう…………♡♡♡♡」

乳首とクリトリスから迫り上がってくる感覚に体を反
らす♡♡♡

なんとか立っていた足が小刻みにぶるぶると震え出し、

体を思っきりしならせた♡♡

「うあゝ、あ、……………、♡♡♡うあああああ…ツツツ
!♡♡♡♡♡」

絶頂にピンと伸びる足と背中♡♡

その力を緩める暇もなく背後からリナリに抱えられ、
そのままバスタブの端に座った彼の膝に乗せられた♡

「いい匂い…」

耳元でそう囁くような声がして、そのまま耳をしゃぶ
られる♡♡♡

「……あッ、あ？♡♡」

丸ごと口に含まれ、輪郭をなぞるように舐められ、舌
を差し込まれ♡♡

深いところで水音が響いて肌が粟立ってしまう♡♡♡

すると私の足の間にしゃがんだカナンは私の足を大きく
開かせ♡♡

「真っ赤だ…、うまそ」

ぶぢゅッ♡♡♡♡

こちらはクリトリスにしゃぶりついた♡♡♡

「ひ、い、ッ♡♡♡」

いったばかりで敏感になったそこが、さっきまでの硬い皮膚とは違う、柔らかい粘膜に包まれる♡♡

れる、れる…♡♡れるれる、れるお……♡♡♡♡♡

「うあ♡♡あ、ああんっ♡♡ん…ッ♡♡」

クリトリスを含んだ口内で舌が蠢いている♡

れるっ♡れるっ♡れるっ♡れる…お♡♡♡べるっ♡♡

「……ッ”♡♡ん♡♡♡っ、う”♡♡♡」

その舌がクリトリスを押し潰し圧をかけて舐め回すから♡♡♡

べる、べる、べる♡♡♡れるお♡♡れる、れる♡♡れるれるれる…♡♡♡♡

「〜〜〜ッ”♡♡♡あああッ♡♡♡♡」

……足が、勝手に開いてしまう♡♡♡

ひどいことをされるならその苦痛を我慢するだけなの
に♡

気持ちよくされたら……♡♡♡♡

「お前、いい顔するなあ♡♡魔王様が目つけたの正解かもな♡♡」

顎が上がってしまったまま足をピンと突っ張りなんとか耐えていたのに♡♡♡

そう言いながら近づいてきたルドまで、さっきまでさんざん弄られていた乳首を口に含み♡♡

ちゅッ♡♡ちゅぽっ♡♡ちゅぽッ♡♡♡ちゅ、ちゅ、ちゅ、ちゅ、ちゅっ♡♡♡

細かに吸い付くから♡♡♡

「くアああッッ♡♡♡♡♡あ……ッ”ッ”！♡♡♡♡♡」

リナリに抱えられながらも彼の膝の上で体をくねらせた♡♡

ぢゅ、ぢゅる♡♡ぢゅぶ♡ぢゅぶ♡♡ちゅ、ちゅ、ち

ゆ♡♡♡

わざとらしく水音を立てながら耳を食まれ舐められ♡
べるべるべるッ♡♡♡れるっれるっ♡♡れるろれるろ
れる……♡♡♡♡

分厚い舌を押し付けられたままのクリトリスは潰すよ
うに舐め回され♡♡

ちゅぽっちゅぽっちゅぽっちゅぽっ♡♡♡ちゅろ、ち
ゅろ、ちゅろっ♡♡♡

勃起したままだった乳首は小刻みに吸われる♡♡

「な、なんで、こんな……あ、♡♡あ…ッ♡♡ああっ
♡♡」

そう口では言いつつももう抵抗なんてできなかった♡
♡

足は自ら限界まで開き、胸を突き出し、耳も差し出す
ように顔を傾ける♡♡♡

気持ちいい♡♡♡

三人がかりで体のあちこちを愛撫されるのが気持ちい
い♡♡

なぜこんなことをされるのかは分からないけれど今は
この快感に流されてしまいたい♡♡♡♡

「ふっ♡ううッ♡♡♡うう……、ッ♡♡♡♡♡」

下半身が力んでしまう♡♡

そうすると一気に気持ちいい感覚が膨れ上がっていく

♡♡♡♡

ぢゅぶっ♡♡ぢゅっ、ぢゅっ、ぢゅっ♡♡♡ぢゅるる、
ぢゅるるるっ♡♡♡

れろお♡♡れろれろ♡♡れるっれるっれるっ♡♡♡べ
るべるべるるっ♡♡♡

ちゅぽちゅぽちゅぽちゅぽッ♡♡♡ちゅううう…
……♡♡♡♡♡

「…ッ、く、あ♡♡あ♡♡♡また、イっちゃう♡♡♡こ
れ、イっちゃうよお…♡♡♡♡♡んあ、あゝ ああッ♡
♡」

絶頂を宣言すると空いていた片方の乳首をリナリが指
で挟み、くにくに♡♡とやわく刺激してきて♡♡♡♡♡
ビリビリと響くそれに、私は音を上げた♡♡

「……………ッッ！！♡♡アゝッッ、ああああッッ！！♡♡
♡♡♡♡」

リナリの膝の上で体が何度もビクつく♡♡♡♡♡

「…………、ツ、…、っ、ふ、う♡♡ふ…………うう、ふー～
……♡♡♡♡♡」

二度目の絶頂に息を整えようとしているのに私の体は
後ろからリナリに抱え上げられてしまった♡

膝の下から腕を通され大きく開かされ、背中は彼の胸
に預けている♡

その私の前には、大きな♡ちんぽ……♡♡♡

ルドが衣服を脱ぎ捨て既に勃起してお腹に当たりそう
なほど反り返っている魔族のちんぽを手でしごいている
♡私のおまんこを狙っている♡♡

「もう欲しいんだろ♡ちんぽに釘付けじゃん♡♡」

「ち、ちがう、ちがいます…！」

「そう言いながらまだ見てるし♡♡言っとくけど魔王様
のちんぽはもっとご立派なんだからオレたちので慣らし
ておかないとしんどいぞ♡」

「ひ…♡♡♡」

そう言いながらルドは近づいてきてその先端を私の充

分に濡れた割れ目に押し込んだ♡♡

経験のないほど太い、熱いそれがゆっくりと入ってきて目を見開く♡

中から押し広げるそれは次第に私のおまんこに埋まっていって、隙間なくぴったりと収まって♡♡

すぐにルドは腰を動かし始めた♡♡♡

ぐちっ♡♡♡

ぐちっ♡♡ぐちっ♡♡ぐちっ♡♡ぐちっ♡♡ぐちっ♡♡
♡ぐちっ♡♡ぐちっ♡♡

「う♡♡あッ、あ♡♡…ッ、ん♡♡ん”、ううう、ッ♡♡♡」

「あは、人間まんこ気持ち～…♡♡ギッチギチなのにそれでもちんぽ締めてくれてる♡♡♡」

ぐちっ♡♡ぐちっ♡♡ぐちっ♡♡ぐちっ♡♡ぐちっ♡♡
♡ぐちっ♡♡ぐちっ♡♡

きつく締め上げてしまう私のおまんこにルドは小さなピストンを繰り返す♡♡

そうされるとゆっくりとほぐされていくおまんこが少しずつ快感を覚えてしまう♡♡♡

ぐちっ♡♡ぐちっ♡♡ぐちっ♡♡ぐちっ♡♡ぐちっ♡
♡ぐちっ♡♡ぐちっ♡♡

「あッ♡♡♡あ♡♡ん” ああッ♡♡あ……、ツう♡♡」
「お前も気持ちいいんだろ♡♡ここも一緒にやってやる
♡♡♡」

ルドの指が勃ったままの乳首の上に添えられて♡♡
…カリカリカリカリカリカリカリカリッ！♡♡
♡♡♡

そのまま高速で上下に弾いた♡♡♡♡♡

「んううううッ！！♡♡♡♡♡」
「ううわ、すっげえ締まった♡♡♡」

浮いた足がビクビクと跳ねる♡♡♡
お腹がぎゅうっと締まって、ただでさえギチギチのお
ちんぽを更に締め上げて♡♡

カリカリカリカリカリカリカリカリカリッ！♡♡♡
♡♡

ぐちぐちぐちぐちぐちぐちぐちぐちぐちッ！♡♡♡
♡♡

ルドの小刻みピストンもペースを上げた♡♡♡

カリカリカリカリカリカリカリカリカリッ！♡♡♡

♡♡

ぐちぐちぐちぐちぐちぐちぐちぐちぐちッ！♡♡♡

♡♡

カリカリカリカリカリカリカリカリカリッ！♡♡♡

♡♡

ぐちぐちぐちぐちぐちぐちぐちぐちぐちッ！♡♡♡

♡♡

「あゝ あああッ、だめっ、だめええ！！♡♡♡♡♡」

叩きつけられる快感に耐えられなくて頭を振る♡♡

下半身が踏ん張れなくても勝手に絶頂に近づいていく

♡

無理やりイカされる♡♡♡♡

カリカリカリカリカリカリカリカリカリッ！♡♡♡

♡♡

ぐちぐちぐちぐちぐちぐちぐちぐちぐちッ！♡♡♡

♡♡

カリカリカリカリカリカリカリカリカリッ！♡♡♡

♡♡

ぐちぐちぐちぐちぐちぐちぐちぐちぐちぐちッ！♡♡♡
♡♡

「おねが、…ッ、やめ、イっちゃう、イっちゃからあ！
♡♡♡♡あッ、ア` アアっ！！♡♡♡♡♡」
「出すぞ♡♡一緒にイこうな♡♡♡♡」

■続きは製品版にて♡